

訳者より

私がこの著作を知ったのはチャーチルが22歳のときに書いた小説「サヴローラ」を翻訳していた時でした。以下は主人公の本棚の描写です。

…ショーペンハウアーの哲学はカントとヘーゲルの間にあり、ヘーゲルは「サン・シモン回想録」と最新のフランスの小説を押しつけていた／「ラッセラス」と「ラキュレ」は隣り合っていた／おそらく「デカメロン」の豪華本はギボンの有名な歴史書の重厚な八巻を不適切に延長してはいなかった／「種の起源」はブラック・レター（\*12～15世紀まで使われていた書体）の聖書の横にあった／「国家（\*プラトン）」は「ヴァニティフェア」と「ヨーロッパの道徳の歴史」の間で均衡を保っていた。マコーリーのエッセイは執筆テーブルの上であって／開かれていた…

後に自叙伝“My Early Life”でも言及されていることに気づきました。チャーチルは大学に行っていません。兵学校の騎兵科を卒業後、インド駐留時代の午睡の時間の読書から歴史、政治、哲学、思想を学んだと述べています。少し読んでみたところ、チャーチルの思想の核心に最も近い書籍の中の一冊ではないかと感じました。

本著作は明治43年に「歐洲道徳史」として一度和訳されています。大隈重信氏が設立した大日本文明協会の企画で、訳者は徳広万氏と三浦範三氏でした。前者は教育者、後者は牧師だったようです。国会図書館デジタルコレクションで読めますが、さすがに文体が古く、読みやすいとは言えません。ただし、どうしても意味が掴めないとき、なんとなく確信が持てない時に大いに助けていただいたことは申し述べておきます。また同書では原書の第一章“道徳の自然史”は省略されています。この部分はこれが本邦初訳になると思われます。

訳者は大まかな聖書の知識以外、西洋古典時代についてほとんど何も知らない状態で開始しました。deepL、wikipedia、そしてweblioの英和辞典、類語辞典には大変お世話になりました。人名の表記はなるべくwikipediaのタイトルと一致するようにしました。また初出時には生没年、ファーストネーム、ミドルネーム、異名を括弧内に注記しました。ただしローマ皇帝だけは生没年ではなく在位期間としました。

訳を見直すと、毎回大量の不備が見つかります。間違いはともかく、意味が正しくても、もっと文章の流れを良くしたい、もっと分かりやすくしたい、もっと美しく表現したい、という部分が後から後から出てきてキリがありません。しかし、チャーチルも「完璧主義では麻痺に陥るだけである。」と言っています。まずは全五章中、四章の終わり近くまでを公開させていただきます。順次校正も進めていきますが温かい目で見守っていただければ幸いです。

2022.12.30